

「言葉」

中央市立玉穂中学校三年 小澤 瑚子

「どうして。」

思わず声が出てしまった。そのとき私が見ていたのはアスリートに対する誹謗中傷のコメントが増加しているという新聞記事だった。そこに載っていたのはオリンピックメダリストばかりだった。

特に、卓球の水谷準選手に対しては、「死ね」「消えろ」「人間やめろ」などの投稿が相次いでいた。しかし、水谷選手は「免疫ありすぎる俺の心にはダメージない」と気丈に振る舞ったという。この言葉を見た瞬間、私は悲しくなった。慣れてしまうほど誹謗中傷のコメントを受けているという事実がショックで仕方なかった。

五輪開催について賛否両論ということは、アスリートの方々が一番分かっていると思う。どうしてオリンピックという夢の舞台で活躍し、私たちに勇気と希望を与えてくれた人が悪口を浴びせられているのだろう。何故そういう行為をする人がいるのだろう。強い怒りを覚えた。私の中でいつも輝きを放っている選手たちが心ない人の言葉でこんなに苦しんでいるなんて。選手たちの心を傷つける権利は誰にもないはずだ。

過去に、女子プロレスラーの木村花さんがSNS上でのバッシングが原因で自殺してしまったという事件があった。「いつ死ぬの」などの言葉が木村さんを精神的に追い詰め、自ら命を絶った後も「あんたの死でみんな幸せになったよ、ありがとう」などのコメントが続いた。今でもとても胸が痛い。

それから一年以上が経った今、社会の風潮は改善されただろうか。私には何も変わっていないように思える。自分の言葉が人を死に追いやることを分かっている人がまだいる。これは大きな問題であると思う。もしかしたら、遊び半分や傷つけているつもりはないのかもしれない。私はその人に教えてあげたい。「あなたのしていることは、人の死につながる可能性が十分あります。」と。

今思えば私も直接ではないけれど、悪口を言われたことがある。私は生徒会役員選挙で女子副会長に立候補した。しかし、選挙期間中に一人の男子友達が言った。「あいつら毎日お前の悪口帰り道で言いながら帰ってる。」一瞬頭が真っ白になった。それは知りたくなかった現実だった。彼が善意で言ってくれた

のは分かっていたけれど、私は自分が想像する以上に傷ついていたのだろう。次の日から周りの人が全員怖くなった。辛くても、誰にも言えなかった。悪口の内容は、「あいつに票を入れるな」や「どうせ当選しない」などだったという。そのとき「これが悪口を言われる辛さなんだ」と気づいた。たとえどんな理由があろうと、悪口で人の心を傷つけることはあってはならないことだと思う。その人たちが今でも私のことを悪く言っているかは分からない。もし言っていたら、自分がしていることが愚かなことだということに、一日でも早く気づいてほしい。

そう言う私はどうだろうか。自分が放った一言で取り返しのつかなくなるようなことをしていないだろうか。これは自分を含め、誰もが「していない」とは言い切れないと思う。なぜなら、人の感じ方はそれぞれ異なるので人と接していく上で「傷つけない」ということは不可能に近いからだ。だからこそ、自分の言動を見直すこと、人の気持ちを想像しながら接することは大切だと強く感じる。

言葉には力がある。一つは、人をあたため、元気づける力。もう一つは人を傷つける力。今私がこの文を書いている瞬間も誰かが読んでいる瞬間も、言葉の使い方を誤っている人がいる。その人たちによって失われた命を無駄にしてはいけない。そして二度と同じ過ちを犯すようなことがあってはならない。だから、言葉を刃物にしている人は、今すぐやめてほしい。特にSNS上ではお互いの顔が見えないという怖さや、コメントの出所の特定が容易ではないという点がある。しかし、言っても自分だとはばれない、ばれないから好きなだけ言っても良いという訳では決してない。もし自分がされたらどう思うかを考えるべきだ。一度立ち止まって考えるという心のゆとりがあれば、この世界から誹謗中傷問題はなくなっていくだろう。

私の身の回りでも、常に誹謗中傷がある。これからは、それに同意してしまう弱い心ではなく、自分の思っていることを伝えられる強い心を持って生活していきたい。